

私が考える「主体的・対話的で深い学び」

私が育成を目指す資質・能力

自分の考えや思いを一生懸命相手に伝え、相手の言葉にも真摯に耳を傾けることができる力。そうした力の土台として、伝え合い、聞き合うことで、自分や相手の困り事を解決しようとする、対話の必要性を察知する感性が不可欠だと考えている。



資質・能力を育む主体的な学び

「話さなければいけない」ではなく、思わず前のめりに話したくなるような学び。そのためには、「みんなはどう考えているのだろうか」「本当はどうなのだろうか」と他者の考えを聞き、自分の考えを言いたくなる題材やペアワークの仕組みで、生徒の感情を動かすことが授業において必要。

資質・能力を育む対話的な学び

英語表現において、そして英語を通して学んでいる題材について、自分と異なる意見を前にした時に、「なぜ、自分とは違うのか」と、他者とともに考えられるような学び。そのためには、生徒が安心感を持って授業に臨めることが大切。

資質・能力を育む深い学び

「どうして?」「なるほど!」といった声上がる学び。そのためには、生徒が自分なりの疑問や仮説を持つことが必要である。疑問や仮説を持つためには、教師が話し過ぎないようにすると同時に、発問の質を高める必要がある。教師の遊び心も重要。



もり・かずま

教職歴9年。同校に赴任して3年目。アクティブ・ラーニングの実践は8年目。本誌2018年2月号「実践 アクティブ・ラーニング」に登場。

大阪府立今宮高校 旧制大阪府立今宮中学として設立。進学校型の総合学科として1996年に普通科から改編。総合学科の特色を生かして幅広い知識を得ながら自主自立の精神を育む教育を実践し、社会をリードする多くの人材を育成してきた。

設立 1906(明治39)年 形態 全日制/総合学科/共学 生徒数 1学年約240人

2020年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、大阪教育大、神戸大、大阪市立大などに36人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ136人が合格。

URL <http://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/>

主体的・対話的で深い学び

実践事例

5

「知りたい」「伝えたい」「思いを、
題材、人間関係、授業の仕組みで刺激する

大阪府立今宮高校 森 一真

かずま

私が実践してきた「これまで」の授業

英語を使う必要性を
授業の中で醸成する

授業がより実践的な英語力を身につける場となるように、「英語を使いたい」という気持ちを生徒に抱かせることに力を注いだ授業改善に取り組んできました。「この話をしたい、聞きたい」「この人の考えを知りたい、この人に考えを伝えたい」「みんなで話し合ってこの問題を解決したい」といった気持ちが生まれた時、生徒は言語活動として英語の授業に没頭していきます。そうした気持ちが生徒の中に生まれるように、授業が生徒にとっても自分にとっても学びたいと思える内容になっているか、常に意識してきました。

例えば、2年生の授業では、阪神・淡路大震災での被災経験がきっかけとなって、泥水を飲み水に変える水質浄化剤の開発に成功した日本の中小企業経営者を取り上げた英文が教材となります。浄化剤の開発には納豆菌を利用するなど、紹介されている内容は十分興味深いものですが、生徒の興味・関心をさらに高めるに



写真1 「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業。スライドを用い、前時までの語いや内容の確認、音読とリスニング、空所補充を用いた内容の読解を、ペア活動を主体に進めていく。

は、私からの適度な情報提供と生徒への問いが欠かせません。震災がもたらした被害について伝え、「震災は、今の私たちの生活をどのように変えたと思いますか」と、意見が分かれば「みんなはどう思っていますか」と、生徒に「みんなはどう思っているのだろうか」「自分の考えを聞いてほしい」と疑問や仮説が生まれ、他者と話したいと心から願うようになるのです。話し合いの途中には、私が「みんなはこう思っているだろうけど、実は……」と、生徒の疑問や仮説を超える事実や視点を与え、生徒の思考を活性化させていきます。私の授業ではペア活動に多くの時間を割くため、英語を「言葉」とし

て気軽に使いながら、脳を活性化させる場づくりの工夫を重ねてきました。例えば、私からの問いにペアで意見を述べ合う際、意見を述べる順番が決まった後に私が問いを与えるよりも、順番が決まる前に私が問いを与えた方が、ペアの生徒はどちらも当事者意識を持って頭を働かせます。プリントを使って、文法事項の中で分からないところをペアで説明し合う場合にも、いきなり「分からないことを話し合ってください」と促すことはしません。分からないところを打ち明けやすくするように、まず個人で理解があいまいなところに下線を引かせてから、それをペアで交換し、自分が線を引いた部分について話し合えます。そうした工夫や配慮を徹底した授業を重ねていく中で、つたない英語であっても自分の話したい内容を話し合える雰囲気を作成してきました。

コロナ禍における気づき

家庭学習課題は成長を自覚させるものにした

新型コロナウイルスの感染拡大を

受けた臨時休業中は、授業動画の配信による一方向型のオンライン授業と、課題配信によって授業を進める期間がありました。ただし、プリントの問題を順番に解いていく課題は、生徒にとっては意欲的に取り組みにくいのですし、そうした課題が生徒の英語力をねらい通りに高めているのか、英語という教科特性に見合っ



写真2 森先生の授業には、生徒による様々な活動が盛り込まれるが、先生が心がけるのは、生徒の学びのリズムを乱さないよう、指示を短くすること。もちろん、「聞く」活動も大切だが、聞かせたいのは手順の説明ではなく、テーマに対する他者の考えだ。

たものなのか、私は常々疑問を感じていました。そこで私は休業中、次の2つの課題を生徒に与えました。1つは、私が英語で話している動画を生徒が動画投稿サイトで視聴し、その内容の要旨やそれに対する自分の意見を英語で述べるといった思考型課題です。もう1つは、スライドを使ったトレーニング型の課題です。

日本語が書かれている複数のスライドを動画の中で次々に投影し、生徒はそれを英語に直して発音していきます。そして、最後に、発音してきた単語を使えば説明できる絵を投影し、その説明の英文を作るという課題です。

これまで私は、生徒に予習などの家庭学習に取り組ませることはありませんでした。臨時休業は、身につけた英語を使って実際に表現する達成感を、生徒に味わってもらう家庭学習のあり方を考えるきっかけになりました。そして、英語という教科では、ICTを活用することで、そうした家庭学習の実現の可能性が高まってくるように思います。

私の「これから」の授業、越えるべき壁

ICTの活用によっても 教育活動の質向上を図りたい

私がこれからも大切にしたいと考えているのは、授業で英語を使いながら生徒が、「この人のことを知りたい」とクラスメートに知的好奇心を抱いたり、「この人のように英語を使えるようになりたい」と目標とする憧れの存在を見つけたりして、

英語に対するモチベーションを高めることです。そして、「このようなステップでトレーニングを積み重ねば英語が上達するよ」などと、生徒一人ひとりに見通しを持たせ、主体的な学習をサポートしたいのです。そのため、生徒が自分の英語力を自覚し、今後の見通しを教師である私と共有する場として、パフォーマンステス



写真3 新たに学んだ語いや文法事項は、プリントを見て覚えたからといってすぐに使えるものではない。覚えたことを書いたり、話したり、聞いたり、ペアやグループの活動の中で実際に繰り返し使いつつ、真の英語力として定着させていくことが求められる。

トのさらなる充実が不可欠です。しかし、現状のパフォーマンステストには課題もあります。私は、スピーキングなどのパフォーマンステストを実施する際、授業2コマ分を使っていきます。生徒たちはプリントの課題などに取り組みながらパフォーマンステストの順番を待つのですが、2コマで40人の評価をする

ためには、生徒がパフォーマンスに没頭していても、短い時間で切り上げているのが実情です。

パフォーマンステストを充実させるために、私が期待しているのが、ICTの活用です。生徒が自らのパフォーマンスを撮影し、それを提出させることができれば、パフォーマンステストに必要なスキルの下支えとなります。生徒にとっても、自分の成長を可視化することができ、今後の学習の見通しを立てやすくなりますし、生徒同士でお互いのパフォーマンスを見合えるようにすれば、身近に憧れの存在ができることにもつながるはずです。ICTの活用は、教育活動の質向上に大きく寄与するものだと思います。

英語を使いたいという思いは、新たな価値観に出合いたいという欲求であり、その欲求を満たす機会が留学であり、そして言語活動です。英語や国語はもちろん、高校のすべての授業で、新たな価値観との出会いを生徒に体感させることができたら、生徒の学びはもっと豊かになります。業務の削減をしながら、教科や学年を超えた指導ノウハウの共有も私たちの課題です。